

絵本の新しい表現形態について

The New Representation for the Picture Book

廣松 新也^{*1}
Shinya HIROMATSU

森田 均^{*2}
Hitoshi MORITA

^{*1} 長崎県立大学大学院国際情報学研究科
Graduate School of Info-Media Studies, University of Nagasaki

^{*2} 長崎県立大学国際情報学部
Department of Info-Media Studies, University of Nagasaki

This research clarifies the traditional picture book's structure by analyzing the existing picture books and establishes the method of making the picture book. Furthermore, I devise the new representation method and verify it by making a picture book.

1. はじめに

本研究の目的は、絵本というメディアに新たな表現の可能性を確立させることである。そのためにまず、[谷本・灰島 06]に取り上げられている絵本を中心に、名作と呼ばれている既存の絵本を読み解き、従来の絵本メディアの基本的な構造や法則を分析した。さらに、それらの法則に従って実際に絵本を試作し、分析の妥当性を確認した。

次に、それらの基本構造・法則に当てはまらない新たな表現形態を設定し、その設定の元で実際にオリジナルの絵本を制作した。制作後、どの点が新しいかを自ら検証し、新たな表現形態のひとつとして提示したい。

2. 絵本の基本的な構造・法則

絵本は、一つの場面がページあるいは見開きごとに絵(と文章)によって描かれており、ページをめくるとそれらの場面が積み重なっていき、物語が展開していく。また、製本の都合上、基本的にページ数が 8 の倍数になるという制約があるため、これに従って場面の数も決まる。

ここでは、これらの構造が、絵の描かれ方(登場人物の動作の方向や時間の流れ)にどのような影響を与えているのか、絵本構造を構成する要素としてどのようなものが必要なかを明らかにする。また、同一のテキストから作られた 14 冊の絵本を比較分析することによって、絵本を制作する際に何らかの法則が存在しないか調査した。

2.1 絵の描かれ方

絵本に描かれている登場人物の動作や時間の流れは、基本的にその絵本が左開きか右開きかで決まる。

左開きの場合、絵の時間的・動作的な流れは左から右へと流れていく。右開きの場合、絵の流れは右から左へ(もしくは上から下へ)と流れていく。左開きか右開きかは、基本的には書かれている言語によって決まる。書かれている言語が左から右に書かれている場合は左開き、上から下に書かれている場合は右開きとなる。

左開きの絵本の例として、[赤羽・大塚 67]が挙げられる。特に 17~20 ページにかけて(扉ページの次ページを 1 ページ目とする)の競馬のシーンに、左開きの絵本の特徴が顕著に現れている。まず、文字が横書きのため、全ての馬は右へ向かって走っているように描かれている。競馬が始まった段階では、主

人公スーホの乗る白い馬はノド(見開きの中央線)よりも左側に描かれ、右側には他の馬が描かれている。この段階では、白い馬は他の馬と比べて遅れていることが読み取れる。しかし、ページをめくると、今度は白い馬だけがノドよりも右側に描かれており、他の馬は全てノドよりも左側に描かれている。白い馬と他の馬の距離も 8 頭分ほど開いているため、白い馬が他の馬を一気に追い抜き、引き離して先頭を走っている様子が読み取れる。ページを左にめくると、白い馬の圧倒的なスピードが感じられるようになっている。

2.2 絵の構成要素

絵の構成要素が最も少ない絵本として[Lionni 67]がある。この絵本では、登場人物や風景などが単色の丸や四角で表現されている。例えば、2 ページ目には青い丸が描かれており、その下に「あおくんです」という文が書かれている。

この 1 ページ目において、青い丸が「あおくん」であると言葉で補足説明されることによって、青い丸が一人の登場人物として認知され、物語が展開していく。

このように、単色の丸であっても、文章で補足説明されることによって、絵本の絵として機能する。

2.3 ノドの機能

見開きの中央にあるノドが、場面を分ける役目として機能する場合もある。[Burningham 78]では、ノドを中心に左ページに海辺でくつろぐ両親(現実世界)、右ページに海で冒険するシャーリー(空想世界)が描かれており、左ページと右ページで、それぞれ独立した物語が展開する。

絵本はその構造上、見開きに必ずノドが存在する。多くの絵本では、この黒い線は画面上に“無いもの”として扱われるが、このように場面を分ける線として利用する手法もある。

2.4 場面分けの法則

次に、宮沢賢治「注文の多い料理店」を元に作られた 14 冊の絵本を比較することで、一定の法則が見られないか分析した(14 冊のうちの 1 冊は、自分で描いたものである)。

まずは、14 冊の絵本それぞれの、場面の切れ目となっている文を抜き出し、比較してみた。結果として、場面分けの法則には以下の 4 通りがあることが分かった。

- ① 場所の移動で場面(画面)が変わる
- ② 会話の切れ目で場面(画面)が変わる
- ③ 接続詞の前で場面(画面)が変わる
- ④ 登場人物の動作の完了で場面(画面)が変わる

ただし、どれか 1 つの法則のみで場面分けが行われた絵本はなく、これらの法則のうち、いくつかを組み合わせる場面分けが行われていた。例えば、自分で描いた絵本では、これらの法則のうち「会話の切れ目で画面が変わる」法則を主な法則とし、「登場人物の動作の完了で画面が変わる」法則を補佐的に併用して場面分けを行っていた。

複数の法則を組み合わせる理由としては、場面(画面)分けよりも先に「ページ数の制約」があり、依頼されたページ数に合わせて場面(画面)を分ける必要があったからだろう。もしくは、画家それぞれに「絵にしたい場面」「描きたい絵」があり、その絵を生かすために場面分けを行った可能性も考えられる。

2.5 第三者視点の法則

次に、これら 14 冊の絵本で、文中の何が絵になっているのかをそれぞれ調査し、絵を描く際の一定の法則が得られないかを考察した。

ほぼ全ての絵本に共通していたのは、紳士の姿が描かれていた点である。つまり、第三者から見た視点として描かれているものがほとんどだった。また、紳士の姿はテキストに書かれている動作や表情が描かれていた。変わった視点から描かれていたのは[小林 89]で、この絵本は紳士の視点から見た世界が描かれていた。また、物語上重要な役割を果たす犬や、何度も繰り返される注文・扉・注文を実行するための道具(鏡やブラシ、金庫、壺など)が多く描かれていた。

絵の描き方は作家によって様々で、それが作家の個性ともいえる。そこに一定の法則を見出すことは困難であるが、あえて述べるならば、「第三者視点で場面を描く」ことが、絵本を作る際の一つの確立された手法と言える。

2.6 実作による基本構造・法則の検討

以上から見出された基本構造・法則の正当性を確認するために、今度はそれらの構造や法則に従って「注文の多い料理店」の絵本を再度作ってみた。また、誰でも再現できるように、絵本の絵を全て部品化し、絵が描けない人でも部品を配置するだけで絵本を作れるようにした(図 1)。



図 1 自作した絵本「注文の多い料理店」表紙及び p.01-02

制作後、基本構造・法則に則って絵本が作られているかを検討し、結果、以下の法則と手順を確立した。

- ① 右開きか左開きを定める
- ② ページ数の制約(8の倍数)から場面数を決定する
- ③ 場面分けの法則に従って場面を分ける
- ④ 開く方向に合わせて登場人物の向きを決め、配置する

3. 新しい表現形態の獲得

これまでに、絵本の基本的構造を明らかにし、絵本制作におけるルールや法則を確立してきた。今度は、これらの構造や法則に捉われない、絵本における新たな表現形態を模索していく。

3.1 新しい表現形態の設定

「絵本は“綴じられた”メディアであり、見開きごとの場面の積み重ねによって物語が展開することが特性である。ならば、この構造を破壊することによって、新たな表現形態を獲得できないだろうか」「絵本は読者の性質上、壊れやすいものである。ならば、初めから“壊せる”絵本を作ってみてはどうか」この 2 つの発想から、ページをバラバラにでき、好きな順番に並び替えることが可能で、さらに読むだけではなく触って遊べる「壊せる絵本」を制作してみることにした。

3.2 実作と検討

壊せる絵本「ころがるいし」(図 2)

- 主人公である石が、登り道やでこぼこ道などを転がり続ける、というストーリー。
- 順番を並び替えることで、転がる道が入れ替わる。
- 綴じるのではなく、リングファイルで全ページをまとめている。このため、読者が自分の好きなように道を描き、ページを追加することも可能(誰でも描けるように、主人公の石や道は極力単純な線で描き、再現性を高めた)。

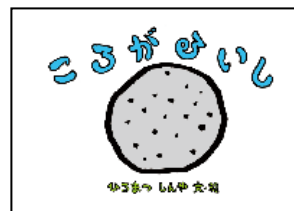


図 2-1 壊せる絵本「ころがるいし」表紙

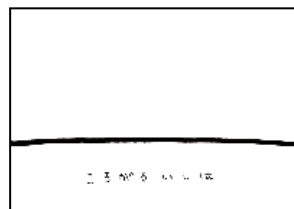


図 2-2 見開き左側のページ

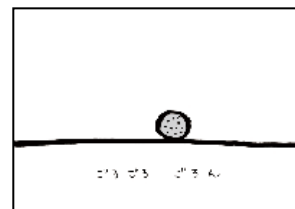


図 2-3 見開き右側のページ①

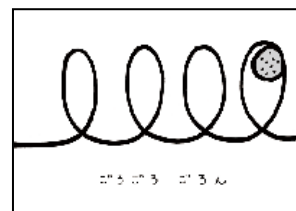


図 2-4 見開き右側のページ②

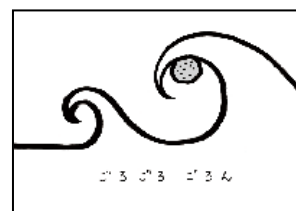


図 2-5 見開き右側のページ③

図 2-2 は見開きの左側に位置するページで、図 2-3 から図 2-5 は見開きの右側に位置するページである。ページの並びを入れ替えることによって、転がる道の順番が替わっていく。

この「ころがるいし」は、ページの順番を入れ替えることができ、また自由にページを追加できるという点においては、従来の「綴じられた/閉じられた」物語構造やページ数の規制から解放された新たな表現形態を獲得していると言えるが、物語の展開としては単に道の形の組み合わせが変化するだけの“一本道”である。たとえばゲームブックのように、読む順番を入れ替えることによって物語の展開も変化するような絵本が作れないだろうか。これが可能ならば、「右開き、左開きの法則」からも開放され、より自由な表現が可能になるかもしれない。

4. 結論

[谷本・灰島 06]を1つの指標として、現在出版されている絵本を調査・分析した結果、絵本の基本的な構造・法則を明らかにした。また、同一のテキストから作られた 14 冊の「注文の多い料理店」の絵本を分析することによって、絵本制作の際に有用な一定の法則が得られた。

次の段階として、それら基本的な構造から逸脱した新たな絵本として「壊せる絵本」という形態を設定し、制作した。ページの順番を入れ替えられるという点においては、従来の絵本にはない新たな表現形態としての可能性が見出せたが、物語自体は単調であり、既存の絵本の枠を破壊するまでに至っていない。

今後は、別の形態の可能性も模索しながら、「壊せる絵本」をさらに進化させたい。

参考文献

- [赤羽・大塚 67] 赤羽末吉・絵、大塚勇三・再話：スーホの白い馬，福音館書店，1967。
- [朝倉 71] 朝倉撰：新装版日本の名作・注文の多い料理店，講談社，1971。
- [池田 85] 池田浩影：宮沢賢治どうわえほん・注文の多い料理店，講談社，1985。
- [今井・中川 02] 今井良朗 中川素子・編：イラストレーション／絵本，武蔵野美術大学出版局，2002。
- [小沢 82] 小沢良吉：チャイルド絵本館日本の名作8・注文の多い料理店，株式会社チャイルド本社，1982。
- [おぼ 88] おぼまこと：日本の名作童話・注文の多い料理店，株式会社世界文化社，1988。
- [黒澤 他 04] 黒澤浩 佐藤宗子 砂田弘 中多泰子 広瀬恒子 宮川健郎・編：新・こどもの本と読書の事典，ポプラ社，2004。
- [小林 89] 小林敏也：画本 宮沢賢治・注文の多い料理店，パロル舎，1989。
- [島田 84] 島田睦子：日本の童話名作選・注文の多い料理店，偕成社，1984。
- [杉浦 90] 杉浦範茂：講談社のおはなし絵本館 9 きつねとぶどう・注文のおおい料理店，pp.30-79，講談社，1990。
- [スズキ 87] スズキコージ：注文の多い料理店，ミキハウス(三起商行)，1987。
- [高野 93] 高野玲子：日本名作絵本〔特装版〕22・注文の多い料理店，株式会社ティビーエス・ブリタニカ，1993。
- [谷本・灰島 06] 谷本誠剛 灰島かり・編：絵本をひらく 現代絵本の研究，人文書院，2006。
- [Townsend 82] John Rowe Townsend, 高杉一郎・訳：子どもの本の歴史 上，岩波書店，1982。
- [Townsend 82] John Rowe Townsend, 高杉一郎・訳：子どもの本の歴史 下，岩波書店，1982。
- [鳥越 01] 鳥越信・編：はじめて学ぶ日本の絵本史 I，ミネルヴァ書房，2001。
- [中川 03] 中川素子：絵本は小さな美術館，平凡社新書，2003。
- [南雲 06] 南雲治嘉：絵本デザイン，グラフィック社，2006。
- [Burningham 78] John・Burningham, 辺見まきなお・訳：なみにきをつけて，シャーリー，ほるぷ出版，1978。
- [長谷川 88] 長谷川集平：絵本づくりトレーニング，筑摩書房，1988。
- [藤本 07] 藤本朝巳：絵本のしくみを考える，日本エディターズスクール出版部，2007。
- [三浦 84] 三浦幸子：注文の多い料理店，福武書店，1984。
- [宮本 89] 宮本忠夫：チャイルド絵本館12日本の名作・注文の多い料理店，株式会社チャイルド本社，1989。
- [本橋 71] 本橋英正：注文の多い料理店，源流社，1989。
- [森田 07] 森田均：文学テキストのハイパーテキスト変換，雄松堂，2007。
- [森本 88] 森本三郎：宮沢賢治童話・注文の多い料理店，たくみ書房，1988。
- [Lionni 67] Leo・Lionni, 藤田圭雄・訳：あおくとときいろちゃん，至光社，1967。